

# もくじ

## 中学生の部

最優秀賞

私達の知らない傷跡

霞ヶ関東中学校

2年 佐藤 早良子

……

2

優秀賞

家族に「ありがとう」

東中学校

3年 味村 優芽

……

3

優秀賞

清掃と向き合う

川越西中学校

3年 矢島 更紗

……

4

入選

最後の教え

野田中学校

3年 笠原 理央

……

5

入選

文豪と人生会議

野田中学校

3年 榊原 千織

……

6

入選

僕を成長させてくれた剣道

城南中学校

2年 磯崎 匠人

……

7

入選

分かり合うための努力

城南中学校

3年 小野寺 美有

……

8

入選

ジェンダー問題に向き合おう

高階西中学校

1年 大河原 紗南

……

9

入選

目に見えないもの

高階西中学校

3年 菊池 陽斗

……

10

入選

水と海、人と世界

砂中学校

2年 宋 美雅

……

11

入選

いつまでも変わらない「好き」

霞ヶ関東中学校

3年 酒井 茜

……

12

入選

私の主張

川越西中学校

1年 眞田 晴彩

……

13

入選

底辺の仕事なんてない

川越西中学校

2年 奥富 寛太

……

14

## 高校生の部

優秀賞

言語の学びを通して

秀明高等学校

2年 趙 芹菜

……

15

入選

いつかの正解へ

秀明高等学校

1年 佐藤 葉月

……

16

選評

……

応募者名簿

……

17

18

# ◆ 最 優 秀 賞 ◆

## 私達の知らない傷跡

霞ヶ関東中学校

2年

佐藤 早良子 さとう さよこ

皆さんは、戦争についてどう考えますか？私はそう問われたら真っ先に、二度と繰り返してはならない歴史だと断言します。

私がこう考え、文に表そうと思ったのは、夏休みに戦争を題材とした舞台に立ち、当時の人々を演じたことがきっかけです。戦争の舞台を演じるうえで、常に死と隣り合わせの感情とはどのようなものなのか、死の間際に人は何を思い、何をするのか深く考えましたが、私は上手く形にすることができず、曖昧な気持ちのまま本番を迎えてしまいました。しかし、そんな戦争という歴史に真っ向から向き合ったなかで、琴線に響いた最後の言葉があります。

「死なないで。どうか最後まで生き延びて。」

公演初日に、演出家の方から頂いた最後のダメ出しでした。演出上、皆物語の中で何度でも死に、最終的に誰一人欠けることなく再度死んで終幕となります。ですが、それはあくまで舞台の常識です。私は知らず知らずの間に、死ぬことが普通であると錯覚したまま、当時の切羽詰まった心情を理解しようとしていましたが、この言葉を聞いて気付かされ、その時初めて、決められたシナリオに抗って「生きたい」と思い、戦争という歴史の本質を少し理解できた気がしました。

皆さんは、「生きたい」と切に願ったことはありませんか？又、その感情を理解することはできますか？私達が平凡な時代を進んでいく限りは、殺し、殺される恐怖や、生への強い執着を感じることは無いでしょう。だから、戦争の残酷さがどれほどのものなのか知らない無知な私達が、どれだけ熱量を注いだとしても、きつとけれん味のない演技には届かないのだと思います。しかし、私達演者がパフォーマンスとして続けていくことで、当時の人々が

流した血の意味を知ることができるのではないか、いつの日か、観客の中の誰かがそのメッセージに気づいて、心の釘となってくれることを信じ、来年も再来年も私は、一時の虚構を全世代へ届けていきたいです。

「世界中で二度と戦争が繰り返されて欲しくない」それは、今年の夏、平和を祈念する事業に参加して初めて心から言えた事です。私が言うのもおこがましいのですが、私は今の、平和で満たされた時代を生きる人々に、もつと平和がどれだけ尊く、争うことがどれだけ愚かなことなのかを、戦争の歴史を通して感じて欲しいと思っています。私達は昔の人々が紡いできた歴史の上に成り立ち、たとえ悲しい歴史でも、その思いに触れたからこそ私達は今も生きています。そして、どんな場所であつてもこの広い世界で出会えたことは奇跡であり、それを踏みにじって争い続けることは間違いだと思っています。その間違いを何度も繰り返してほしくない。だからこそ、私は戦争を批判し、世界の平和を望みます。しかし、もう忘れてしまいたいと考える方もいらつしやるかもしれません。確かに、時はどんな傷さえ忘れていくことができます。そして新たな希望を紡いでくれます。だけどそれで良いのでしょうか。傷つくことも傷つけることも生きることです。でも確かなのは、争いを望む人はそういないということです。時に忘れてしまいたくなるかもしれない。でも現実と幻の区別がつかなくなるような歴史を繰り返したくはないから、私はより多くの人に戦争を知って頂いて、私自身も絶対に忘れたくない、忘れて欲しくないと思います。

私一人に世界を変える力はありません。でも、世界を平和に導く第一歩が生まれる可能性を信じて、私は、今後も変えられない歴史を舞台という手段で伝え、変えることのできる未来を変えていきたいと強く思っています。

# ◆ 優 秀 賞 ◆

## 家族に「ありがとう」

東中学校 3年 味村 優芽 みむら ゆめ

「 Teenキユー」

ああ、やっぱり言えない。私は言えない自分に毎回がっかりする。言えない、というのは「ありがとう」だ。もう、「ありがとう」と言えないことがすっかり日常になっていた。

私は、中学生になってから家族に「ありがとう」と言えなくなっている。小さい頃は何も気にせず「ありがとう」の五文字が言えていたのに。今ではなんとなく気恥ずかしい気がしてしまう。

言える人にとっては、なんで言えないのか恥ずかしがる要素がどこにあるのか不思議だと思う。もっともだ。私もすっかり言えていたときはそう思っていた。今でも、きちんと言わないとなという気持ちはある。「ありがとう」が言えないなんて情けないし、むしろ言わないほうが恥ずかしいことだというのも頭では分かっている。でも、言えない。

ちなみに、家族以外なら何も気にせず言える。なぜ家族には言えないのか考えてみた。私は父、母、二つ上の兄の四人家族だ。私の家族は、相当仲の良い家族なのではないかと思っている。これは間違いないと思う。なぜなら友達に家族のことを話すと「超仲良い家族じゃん」と言われるからだ。では、仲が良い家族なのになんで言えないのか。考えた結果、自分でもよく分からなかった。はつきりしているのは、気恥ずかしい気がして言いたくないということだった。

そんなとき、私は友達に仕事を頼まれた。仕事が終わって友達から返ってきたときの反応は、

「どーも、どーもーねえねえ、あのきー」

だった。そのとき、私は少しがっかりした。すぐ終わる簡単な仕事だったけ

ど感謝してくれるかと思っていたから。あ、もしかして家族もそう思っていたのかな。ようやく気づいた。心の中で感謝していても、相手に伝わるように言わなければ感謝してないのと同じ。当たり前だ。私の「ありがとう」という気持ちはきつと家族には伝わっていない。私が気づかなかっただけで家族はがっかりしている。そう思うと胸がチクリ、と傷んだ。大切な家族を私が、がっかりさせたくない。そして、「ありがとう」が言えない自分にこれ以上がっかりしたくない。

思い切って言ってみた。「ありがとう」のその一言。その響きは、私の中のモヤモヤとしていた気持ちをすっと晴らしてくれた。やっぱり少し恥ずかしいようなくすぐったいような気持ちはあった。でも、それ以上に私の感謝の気持ちがしつかり家族にも伝えられたような気がして嬉しかった。義務教育最後の夏休みの成果は家族に「ありがとう」が言えたことだ。中三にもなっ

て恥ずかしいが、私にとっての大きなことだ。  
人生で最も多く同じ時を共有する存在。真っ先に手を取り合い、助け合える存在。それが家族だと思う。だからこそこれからは、いつも私の遊びに付き合ってくれてありがとう、と父に言いたい。私の話をよく聞いてくれてありがとう、と母に言いたい。数学を分かるまで教えてくれてありがとう、と兄に言いたい。

私にとって一番大切な三人に、私が一番「ありがとう」と伝えていきたい。

「水筒、忘れているよ。」

「ありがとう。」

ありがとう、と言える。私も家族も笑顔になる。これがこれからの私の新しい日常だ。

# ◆ 優 秀 賞 ◆

## 清掃と向き合う

川越西中学校 3年 矢島 更紗 やじま さらさ

「キーンコーンカーンコーン」

小学生の私は、給食終了のチャイムが一番嫌いだった。なぜなら給食の後には十五分間の清掃の時間が始まるからだ。教室の床には消しゴムのカスやチョークの粉などの汚れがたくさんあり、雑巾が真っ黒になることに抵抗があった。清掃が嫌で委員会の仕事があると言い訳をして清掃に遅れることもしばしばあった。

中学校に入学し、黙々清掃が伝統で行われていると聞き、思わず顔をしかめた。つまらない清掃を黙ってやらなければならないなんて、退屈だ。そんな私の考えが一変したのは入学してすぐに行われた清掃集会のある三年生の言葉だった。

「黙々清掃は、『話さない』のではなく、清掃だけに集中するから『話せない』ということ。ただ集中して清掃するだけでなく、学校に清掃をさせていただく感謝をもって清掃をする。それが私たちの学校の伝統です。」

この言葉を聞いて私は衝撃を受けた。勉強をしたり友達と話したりできる学校を私たちが使っていることは当たり前ではない。だからこそ、学校を使わせていただく感謝を、清掃することで伝える。今までの清掃の概念が大きく変わった。清掃の時間を長いと感じていたのは、

「次の休み時間何をしようか。」

など清掃とは関係のないことばかり考えていたからだということによく気づいた。

そこから私の清掃は大きく変わった。それまでの床や壁をなでるような清掃から、汚れと向き合い、汚れを見つけたら磨いて汚れを落とす。一生懸命清掃した場所がよみがえるようにきれいになったと感じた。私は、この素晴らしい清掃を受け継ぎたいと思い、所属する学級委員会の活動で清掃交流会を学年で実施することに決めた。私の学校では自分の清掃場所をより理解し、その場所のプロフェッショナルになるために一年間で担当する清掃場所を一度も変えない。その中で普段見ることができない他の清掃場所の工夫を知るために、学級間で教室や廊下など同じ種類の清掃場所でメンバーを入れ替える交流会を行った。この活動は非常に好評で、活動後にアンケートを行うと、

「自分たちの工夫が共有されて、学年共通の工夫になってうれしかった。」

「清掃する意識が変わるとこんなにもきれいになると知って驚いた。」

など多くの人に気付きがあり、清掃の質を上げることができた。更に十五分以上清掃することを目標に、多くの清掃場所で開始のチャイムが鳴る前に清掃を始め、終了のチャイムが鳴る時間ぎりぎりまで清掃をするなど清掃に対する意識が変わった。

そんな中でも清掃が面倒だと考える人は一定数いる。しかし私は諦めない。なぜなら私自身も小学生の時同じように感じていたからだ。口では伝わらなくてもきつと行動で伝えることはできる。だからこそ私は、誰よりも長く、真剣に、そして丁寧に清掃と向き合っていこうと思う。

## 最後の教え

野田中学校 3年 笠原 理央

かさはら りお

「私、頑張るね。」

自分の力を振りしぼって伝えた、最後の言葉。目の前には気持ち良さそうに眠る大好きな祖父の顔があった。

私の祖父は今年の七月に誤嚥性肺炎のため別の世界へと旅立った。

祖父は元から体が弱かった。それでも、その痛みや苦しみに耐えて生きた三ヶ月間。私はそんな祖父の生き様から、一つのことを学んだ。

祖父が発症した誤嚥性肺炎は食べ物や唾液が食道ではなく、気管に入ってしまうことが原因で起こる病気である。通常はむせて気管から排出する反射機能が働くが、この機能が鈍くなり気管に入り込んだ食べ物を出せなくなることで、肺炎を引き起こしてしまうケースがある。

先ほど伝えたように、祖父は体が弱かったため、病気の進行度が早いと見越して入院生活をしていた。最初の頃は話すことや体を動かすこと、そして、ゆっくりではあるが食べることもできていた。しかし、時間が経過するにつれて病気は悪化していき、最終的には寝たきりの状態になるまで病気は進行了た。

私が最後に祖父に会ったのは亡くなる一週間前だった。嬉しさもあったが、それ以上に驚きのほうが強かった。まるで痛みや苦しみの大きさを体が語っているように見えた。限界に近い中でも、私がかけた言葉に対して、

「ありがとう。」

と、手を握りながら小さな声で返してくれた。その時、かすかに笑顔が見えた。最後に見たあの笑顔は一生忘れないものとなるだろう。

それから二ヶ月が経った今、私はあることに気づいた。入院中のエピソードや会った時の様子から、「生」と「死」の境で過ごしている中で、祖父は「もう無理」などのマイナスな発言はしていない。生きられる時間は限られているかもしれないが、その中でも必死に自分と向き合って見えない敵と闘っていた。このことから何事も簡単に諦めず、出来ないことでもチャレンジし続ける心が大切であることを学んだ。

人生を過ごしていれば大きな壁に出会うことは多いと思うが、その中のほとんどは目で見えない未知の壁であるだろう。どんな手段を使っても壊せず前に進めない場合、ほとんどの人は「無理」という言葉が頭に浮かぶだろう。でも、本当にそう信じてしまつてよいのだろうか。どんなにできないことだとしても、その中に秘めている小さな可能性を掴むことができれば、見えないう壁でも越えられるはずだ。しかし、その小さな可能性は誰もが得られるものではない。様々なものと闘い、深い傷を負ってまでも生き残った勇者にか与えられないものだ。

勇者になるためには、どんなことにも耐えられる強い心と前を向いて進む勇気が必要だ。そのためにも、物事を「無理」ではなく「難しい」と捉えてやってみることを続けていきたい。

これから先、どんなことが待ち受けていようと前に進む足を絶対に止めない。止まってしまったとしても自分の可能性を信じて一步を踏み出したい。世界中の人のために。そして、大好きな祖父と交わした最後の約束のために。

# ◆ 入 選 ◆

## 文豪と人生会議

野田中学校 3年 神原 千織 さかきばら ちおり

「昔、私は、自分のした事に就いて後悔したことはなかった。しなかった事に就いてのみ、何時も後悔を感じていた——」。

この言葉は、文豪の中島敦が発表した「光と風と夢」という中編小説の中で書き記された名言である。

何故私はこんな簡単な答えに辿り着けなかったのだろう。今思い返せば、私はずっと結果にばかりにこだわりの挑戦して失敗したことでこんな嫌な気持ちになってしまっているのであれば、やらなければ善かったと思っただけだった。私と中島敦との違いは、その捉え方だ。

彼は自分のした事に就いて後悔したことはないと言っている。つまり、結果ではないのだ。自分が行動に移せたかどうかに重点を置いている。結果がどうであれ、後悔はしていないということだ。このことに気付いた時、私は思い出した。私が何度もしている挑戦は、毎回同じ結果では終わっていないということに。

私が思う「失敗」とは、自分が挑戦している中でその事は除き、結果として残った評価、価値の良悪で決めていた。しかし、何度「失敗」を重ねても失敗する内容は変わっていた。初めは何も準備をせず失敗。二度目は準備をしたが所々に不備があり失敗。三度目は不備もなかったが相手との少しの表現

力の違いで失敗。というように毎回結果に辿り着くまでの経路が違う。失敗を重ねる度に、少しずつの内容が改善されている。結果はすべて「失敗」だ。しかし中島敦のように重点を変えて考えると、後悔はしていない。結果が悪くても、少しずつ「成功」という目標へ向かっているのだ。何故なら私は今まで気づいていなかったが、自分のしたことに後悔がなかったからだ。

結果ではなく行動したかどうかが重要。今私がこの文の中で云いたかったことや、中島敦が本に記して伝えたかった言葉はこのように一言で表せてしまふ。言ってしまうはこの言葉に似た話はどこにいても耳にする。所謂「あたり前の考え」だ。しかし私は忘れかけていた。この毎日のように他人から言われてきていた「あたり前の考え」に。

私が何度も挑戦し、「失敗」して心が折れそうな時に中島敦という文豪に出逢い、今までの自分の捉え方を考え直された。彼は何十年も前に私が今立ち向かっている壁を乗り越えたのだ。だから私も、もう「失敗」することに恐れない。

「私は、これからたくさんのことに挑戦するのだ。しなかった事に就いて、後悔しないために——」。

## 僕を成長させてくれた剣道

城南中学校 2年 磯崎 匠人

いそざき たくと

僕は、六歳の頃から剣道をやっています。

剣道は他のスポーツとは違っていて、スポーツは普通勝つことが一番の目的ですが、剣道は人として成長することが一番の目的です。だから、剣道の試合は目的ではなく、目的を達成するための手段なのです。

また、剣道は人として成長することが目的なので、礼儀や物をとても大切にします。例えば、稽古をする前と後に礼、道場に入るときと出るときに礼、試合の前と後に礼、面を取るときは先生から、人がいるときは後ろを通る、防具は座ってつける、竹刀の先をゆかにつけない、竹刀をまたがない、道場では正座、面や竹刀を置くときは音をたてない、試合のときはガッツポーズをしないなどたくさんのルールやマナーのようなものがあります。

剣道は、剣道着を着て防具をつけるので、夏は暑く、冬は寒いし、疲れるけれど、剣道のおかげで礼儀などを学べたと思うので、剣道や剣道を教えてくれた先生にとっても感謝しています。このことは、中学生になり剣友会を卒業するときの言葉としても言っていました。

僕は中学生になり、部活動を決めることになりました。剣道以外の部活でもいいと思いましたが、特にやりたい部活はなく、いっしょに剣道をやっていた友達も入るし、見学していてやりたくなったので剣道部に入部しました。しかし、部活が続いているうちに少しかかりした気持ちになりました。なぜなら、部活の雰囲気あまり好きではなかったからです。具体的には、

小学生の頃にいた剣友会よりもだらだらしていて、礼儀があまりできていないと感じました。稽古も楽な気がしました。僕は厳しい稽古をして、もっと成長したいと思っていましたが、楽をしたい気持ちに負けてしまい、部活のみんなに合わせてしまっていました。段々と今まで学んできた礼儀や自分への厳しき、剣道への誇りが失われていくように感じて悲しい気持ちになっていました。部活の仲間は明るくていっしょにいても楽しかったです。しかし、剣道の仲間としての尊敬はほとんどありませんでした。

でも、しばらく稽古をやっていて仲間の良いところに気がつきました。それは、剣道を楽しんでいるところです。部活をやっているとき、仲間と高め合っている姿は楽しそうでした。また、楽しむことが自分にはできていなかったと気づきました。小学生の頃、礼儀を大切にしたり、厳しくするあまり、楽しむことを忘れてしまっていたのかもしれない。でも、仲間のおかげで前よりは楽しめるようになりました。僕は中学生になってから急に剣道が強くなりました。これは楽しむことが強くなることにつながったからかもしれない。

しかし、礼儀や自分に厳しくすることはとても大切なことです。だから、部活のみんなで小さな目標から決めたりして、部活をより良くできるように頑張っています。そして楽しむことを忘れずに、さらに強くなって、人として成長できるようにこれからも頑張りたいです。

# ◆ 入 選 ◆

## 分かり合うための努力

城南中学校 3年 小野寺 美有 おの でら みう

私たちは自分の得た少ない情報だけで他人の人間性や好悪を決めつけてしまうことが多くあると感じます。例えば、Aさんの数学のテストは二十点だという情報を得ると多くの人は、きっと他の教科の点数も悪く、勉強が苦手なんだ。このような勝手な解釈をするでしょう。しかし、本当にこの解釈は正しいのでしょうか。Aさんは数学だけが苦手で他の教科を見ると満点に近いので、勉強が得意と分類されるかもしれません。このように、独断と偏見で人や物事を決めつけるのではなく、相手のことをもっと理解しようと努力することが大切だと思います。

しかし、この問題は今生きている私たちだけが抱えているものではないと思います。その例の一つとして『宇治拾遺物語』のある一話が挙げられます。ちなみに、『宇治拾遺物語』とは、鎌倉時代前期の約八百年程前に書かれた説話物語集で笑い話や教訓話などが集められています。その中で考えさせられた教訓話が子供の木こりの話です。隠題を使った和歌を好む帝が、「ひちりき」というワードを隠題にした和歌を詠ませようとします。しかし、誰も良い和歌を詠むことができませんでした。それを聞いた子供の木こりは自分なら詠めると帝の元へ行こうとします。しかし、木こりの仲間には身分不相応だと止められてしまいます。そもそも、その頃の和歌とは貴族など身分が高く、教養のある人しか詠めないとされていたので木こりの仲間も子供を止めたのでしよう。そこで木こりは、

「歌を詠むことと身分や外見は関係ない。」

と言い、「ひちりき」という言葉を用いた良い和歌を詠みます。この話から、身分や外見で人を決めつけてはいけないという教訓を得ることが出来ます。その他にも『ものくさ太郎』や『沙石集』にも和歌の性質から身分などの教訓を得ることのできる話がたくさんあります。今は和歌を詠めるか否かで人を区別することはなくなりましたが、最初にも述べたとおり今でも無意識に

少ない情報で一方的な断定をしていると感じることがたくさんあります。

その適例が私たち生徒から見ると先生だと思います。私たち中学生は学校や塾、クラブチームなど様々な機会で「先生」という立場の大人と接することがあります。その中で、

「B先生の話し方は苦手。」

「C先生はたくさん指名するから嫌い。」

このようなことを言った経験はありませんか。けれど、これらの一つの要素だけで嫌い、苦手と決めつけて良いのでしょうか。私はこの作文を書くにあたり、様々な先生を観察したり、話を聞いたりしました。どの先生も私たち生徒に授業内容の理解をしてもらえるよう見やすい板書の方法を考えたり、プリントではフォントの工夫をしたり、重要な単語に関する予備知識を伝えることで楽しく覚えられようにしたり、指名することで知識を定着できるようにしたり、勉強以外の相談も聞いて励ましてくれたり、本当にたくさんさんの気遣いを知ることができました。このような先生方の思いやりを知ってしまふと嫌い、苦手と言うことができなくなってしまうか。

確かに、少ない情報から推測して見出した情報が正しいと言える場合もあります。しかし、その推測が間違っていた場合、誤解を生み、良い結果にはなり得ず、人々がそれを繰り返してきたことで昔の教訓が今の私たちにも当てはまるんだと思います。このような過ちを繰り返さないためにも少ない情報から他人の人間性や好悪を決めつけるのではなく、多様な視点で人や物事を見ることが大切だと思います。私はこれからの将来で多くの人に出会い人間関係を築いていくはずです。独断だけで人間関係を取捨選択するのではなく、出会う人についてたくさん知る努力をして、良い関係を築いていけるようになりたいと思います。

# ◆ 入 選 ◆

## ジェンダー問題に向き合おう

高階西中学校

1 年

おおかわら さな  
大河原 紗南

みなさんは、「ジェンダー平等」という言葉を聞いたことはありませんか。

「ジェンダー平等」とは、一人ひとりの人間が性別に関わらず、平等に責任や権利、機会を分かち合い、あらゆる物事を一緒に決めることが出来ることを意味しています。はつきり言ってこの言葉を聞いた時は、何のことかさっぱり分かりませんでした。しかし、最近よくテレビのニュースで「ジェンダー平等」や「男女不平等」などの言葉を耳にすることが多く、深刻な問題だと思いました。

ジェンダーの具体例として、「男性は働いて稼いで、女性の子供を産み、家事をするべき」や、「男の子はヒーロー、女の子はプリンセスが好き」、「男の子はブルー、女の子はピンクが好き」など、考えればいくらかでも挙げられます。実際に私や兄が産まれた時には、出産祝いで、私にはピンクの物、兄にはブルーの物がたくさん届いたと、お母さんが話していました。お母さんは可愛いお祝いが届いて喜んでいたようですが、このようなお祝いを受け取った人の中には違和感を抱く人もいたのかもしれない。

また、私が小学校に入学する時、ランドセルを購入しにお店に行くと、店員さんに、

「女の子はやっぱりこちらの赤かピンクのランドセルですかね。」

と、案内されました。私は水色が欲しかったので、その時、少し嫌な思いをしたのを今でも覚えています。店員さんには悪気は全くなかったのは分かります。ただ、今思えば、そういう何気ない言葉が、相手に嫌な思いをさせたり、傷つけたりしてしまうのだと思いました。

そして、逆に私が相手を傷つけてしまった出来事もあります。小学校高学年の時、低学年の体力テストのお手伝いをしていました。私はショートカット

トの女の子を男の子だと勘違いして、男の子側に誘導しているとその子は、「男の子じゃないもん。」

と、言って泣いてしまいました。その時、私は、人を見た目で判断してしまっていた自分がとてもはかしくなりました。

これらの出来事もあり、日常生活において、ジェンダー問題は身近にあると改めて感じました。そして、ジェンダー問題に私達は、しっかりと向き合わなければいけないとも思いました。

まずは、「男の子だから」「女の子だから」とおしついたり、決めつけたりしないことです。最近の制服のように、男子はスカート、女子はスラックスを着用してもよいというように、今までの概念を一度リセットすることが必要です。

子育て、家事は男性と女性で協力してやることが大切です。私の家は両親が共働きです。お母さんが仕事でお父さんが休みの日は、お父さんはお米をといだり、お母さんが事前に用意しておいた材料で夕飯も作ったりします。また、食後の皿洗いもしています。そんなお父さんをいつも近くで見ている、当たり前のように、自然にできていることがすごいと思い、とても尊敬します。

大事なのは、一人ひとりとって心地良い環境で過ごせるように、相手をお願いする気持ちを持ち続けることです。これはとてもシンプルなことですが、継続するのはとても難しいです。

SDGsにも掲げられている「ジェンダー平等を実現しよう」を、私は自分なりに、小さなことからでも取り組んでいきたいです。

# ◆ 入 選 ◆

## 目に見えないもの

高階西中学校

3 年

菊池 陽斗 きくち はると

僕の弟は、小さい頃から足に病気がある。骨繊維性異形成症という病気で、とても稀な症例だ。病気と言っても普通に生活しているし、体育だってやる。弟は外から見ると元気だけど、実はやりたいことをたくさん我慢しているのだ。この病気は珍しい病気なので、診てくれる医者もあまりいない。そのため両親も周りもどうしてあげたら良いのかわからない。それは、この病気は骨が完成する一六歳から一八歳までの大体が経過観察が中心だからともいえる。

現在、弟の足の腓骨という骨が六年くらいずっと折れている。普通だったら骨は修復して治っていくものだが、弟の病気は骨の修復ができにくいらしい。でも弟は、折れている状態でも走るし、スキップもするし、ジャンプだってする。病気を忘れてしまうくらい元気なのである。でも一年に何回か痛くて痛くて仕方がなく、汗をかいて、涙をこらえて痛がる様子を見ることがある。何かしてあげたいけど、どう声をかけたらいいか、何をしてあげたらいいのかわからない。

今回、弟のことについて書くと思った理由は、外から見ただけではわからない病気がたくさんあるということを知ったからである。僕はサッカーをやっている、電車で移動することが多い。そこでよく目にするのがヘルプマークだった。このヘルプマークは、弟が持っているもので存在は知っていた。ヘルプマークは、外見からわからなくても援助や配慮を必要としている方が周囲の方に配慮が必要なることを知らせるためのものだそう。弟にいつから持っているか聞いてみると、二年前程からだそう。駅のエスカレーターに乗るとき、後ろにいた人から、チツと舌打ちをされたのがとても怖かったそ

うだ。母にも聞いてみると、その日弟は足が痛そうと一緒に歩いていたのだが、エスカレーターに乗るときに足を引きずっていてスムーズに乗り込めなかったときに、舌打ちをされてしまったということだった。その後も、足を痛がっていたので弟を優先席へ座らせていたときに、なぜそこに座っているのかという目を向けられたこともあり、とても辛かったと言っていた。そのときまで、ヘルプマークの重要性についてあまり考えていなかったらしいのだが、この一件で必要だと考え、市役所でヘルプマークをもらってきたということだった。

この話を聞いて、周囲の人の理解を得るためには自分のプライベートな話をする必要が出てくるかもしれないと思ったが、ヘルプマークをつけることで、「支援が必要だ」ということを簡単に周囲に伝えることができる。特に弟のように、外から見るととても元気だが、実は誰かの助けが必要だったり、困っていたりする場合に、このヘルプマークはかなり有効だといえる。

ヘルプマークをつけていなければ、この人はこんなことで困っている、というのは外から知ることはできない。しかし、ヘルプマークを見つけたら、声をかけたり、優先席をゆずったりと助けることができる。僕は助けられるときは助けてあげられる人でいたいと思った。ヘルプマークを知らずにそれをもっていない弟のように、何かしらの理由があつて行動できない人もいる。そんな人たちにも怒らず、優しい気持ちをもって接することができない人でありたいと思った。元気だからといって、自分の価値観を押しつけてはいけない。皆が皆、他者への思いやりをもって、お互いに優しい世界になればいいと考える。

## ◆ 入 選 ◆

### 水と海、人と世界

砂中学校 2年 宋 美雅  
そう みや

私は約二年前、中国から日本に移住しました。私が住んでいたところは、小学校の時から私達に日中戦争などのことを学ばせていて、さらに先生や大人からも昔の戦争のことを教えてもらいました。だから私達はほとんど、国を愛する気持ちは強く、日本は基本的に悪いイメージでした。しかし私の父は周りと少し違って、本やネットで日本のよい文化を知り、日本に憧れて私達を連れて来ました。当時の私は、日本語力がゼロでした。

約二年経った今、私は国語のテストで八十点以上を取れるようになりました。苦勞もしていましたが、今は日本人とほぼ同じ生活をしているのです。もちろん考え方も変わり、日本はとても大好きです。

そんな楽しい生活を送っている中のある日のことです。スマホで中国のSNSアプリの投稿を見ると、日本が大好きな中国人を見つけました。彼女は日本のアニメの登場人物を描いて投稿していました。日本が好きな中国人なんてとても珍しいなと思って、コメント欄で話しかけてみました。そして彼女は明るく返事してきました。私達はすぐに友達になりました。

少し時間が経ったとある日。私はいつものように彼女の投稿を見てみると説明欄にはこのようなことが書かれていました。

「皆さんこんにちは。私は正直、この話をしてもいいか迷っていました。最近、日本のあるアニメにハマって、その主人公の絵を描きました。上手く描けたので、クラスメイトに見せました。私が『これ、最近日本で流行っているの！日本のアニメって本当にすごい！』と言ったんですが、クラスメイト達は『いいアニメならうちら中国にもいっぱいあるじゃん』とか『私だったらこんなの見ないわ』とか、いろいろ悪口を私に言いました。さらに、私が日本のアニメが好きなことが、日本は好き、中国は嫌いだと勘違いされて、みんなが私から離れているみたいです。どうでしょう……。私は日本が好

きですし、中国は私が生まれ育った国なので嫌いと言える訳がありません。これからはどうやってみんなに関わればいいでしょうか……。」「(中国語だったので私が日本語に訳しています。)

私はこの投稿を読んで複雑な気持ちになりました。友達がいじめられたら自分も暗い気持ちになってしまおうでしょう。今回の私は、彼女に「きつと時間が経つと元に戻るよ、大丈夫！」としか言えませんでした。いじめられた彼女はかわいそうですが、私達は離れているので、彼女のために喧嘩するのはもちろん無理です。コメント欄で慰めるしかありませんでした。

このような無茶ないじめの被害者はきつと、彼女だけではありません。中国人のほとんどは、教科書や先生を信じすぎて、客観的に考えることができていないのです。世の中には、絶対的に正しいことはないと思います。私達が住んでいる地球だって、丸いのは確かですが、丸に近いでこぼことした星ではありませんか。客観的に考え、一つの情報だけではなく、多くの情報を手に入れ結論を出したほうが信頼できます。さらに、昔の情報だけでも説得力はありません。教科書や先生、友達に中国がどうか日本がどうかなんて言われても、少し疑って本当のことを調べたりしなければ、その間違えているかもしれないことを信じてしまします。少し昔に戦争が起こり襲われたからといって相手の国を疑ったり、嫌ったりするのも妥当ではないのです。

今はこの世界で、戦争や地球温暖化など、多くの問題が起きています。これらの問題を解決するには、国の政府だけではなく、国や世界を作っている一人ひとりの力が必要です。それぞれ違う川から流れてきた水がなければ海はできません。このように、世界の人々が違う国にいても、同じ人間だと思いい、誰に対しても差別なく優しく関わり合えば、この世界はきつと平和になれるはずです！

# ◆ 入 選 ◆

## いつまでも変わらない「好き」

霞ヶ関東中学校

3 年

酒井 茜 さかい あかね

「月がきれいですね。」

そのまの言葉の意味だけでなく、ロマンチックな告白の場面でも登場するこの言葉。私は、この言葉には日本人の心が表れていると思います。今一度、住んでいる日本について知ること、思わぬところに「好き」を見つけられるのではないでしょうか。

「月がきれいですね。」という言葉が愛の告白を意味するようになったのは、明治時代の文豪である夏目漱石の逸話が由来だといわれています。夏目漱石が英語の教師をしていたときのことです。「I love you」を生徒達に訳させたところ、「私は君を愛する」「あなたを愛おしく思う」と訳しました。しかし、それを見た夏目漱石は、「日本人はそんな風に直球に愛を伝えたりしない。『月がきれいですね』とでも訳しておきなさい。」と教えたそうです。確かに、好きだ、愛していると気持ちと言葉で伝えられる人は少ないように思います。日本人の臆病さにも似た奥ゆかしさを理解した上に、言葉で的確に言い表した夏目漱石も流石というべきですが、時が流れた令和の時代でも使われ続けているということ、これは、多少変われど、日本人の心は受け継がれているということだと思います。

また、西洋庭園と日本庭園の特徴を比べてみると、日本人の美の価値観に触れることができます。

西洋庭園の特徴は、花や緑を基調として自然を加工、規則性のあるシンメトリーなどがよく見られることです。一方、日本庭園の特徴は自然そのままの石や樹木を基調としている、不規則なアシンメトリーなどがよく見られる

ことです。つまり、西洋では緻密な計算で、完璧に整った、圧倒的な美を魅せているのに対し、日本では緻密な計算で計算と見破られないように自然らしさあふれる美を魅せているということです。どちらも違った美しさがありますが、自然との調和を大切にしていって、敬意が感じられる日本庭園の方が人間らしい美しさがあるなと思います。

最近、日本人は断れないからいけない、自分の意見を持っていない、未来を背負って歩くあなた達は挑戦することを恐れてはいけない、というような言葉を聞きました。日本人とひとくくりに言っても、いろいろな考えを持つ人がいますが、日本が世界で活躍していくためには、なにかに挑み、なにかを捨てなければいけないのだと思います。捨てるものを選ぶのは、好きだと思いを伝えられない奥ゆかしさや自然への敬意が感じられる美の価値観かもしれません。でも、私は思いを伝えることに不安を感じ、白い月に紅い恋心を隠して届けようとする臆病さに、計算を計算で包んで、簡単に努力を感じさせまいとする不器用さに「好き」を見つけることができたから失いたくないと思います。中学三年生の私には広い広い世界がどれほど厳しいのか結局分からないし、私の考えは甘いのもかもしれないけれど、完璧を要求される毎日に疲れた頃、人間の臆病さ、不器用さ、それでも前に進む泥臭さが私たちを受け入れ、救ってくれると思います。

急速に変化する今、そして未来に生きる私達だからこそ、心の拠り所となるいつまでも変わらない「好き」を見つけ、大切にしながら生きていきたいと思っています。

# ◆ 入 選 ◆

## 私の主張

川越西中学校

1年

眞田 晴彩 さなだ はるあ

兄が中学生の時、夏休みになると「少年の主張」作文を書いているのを見ていたので、女子である私は中学生になったら「少女の主張」作文を書くのだと思っていました。しかし、男女関係なく「少年の主張」作文に応募するのだと知り、おかしいなと思いました。少年は男子のことを指すのではないか？もしかして元々男子のための大会だったけれど女子もおまけのように途中から参加できるようになったからなのか……。私の心の中には、「なぜだろう？なぜ私が少年に？」と抗議をしたくなるような想いがでてきました。しかし、「少年」という言葉を辞書で調べてみると二つの意味があったのです。一つ目は私の思っていた通りの意味で年の若い男子。男の子。二つ目の意味は年の若い人。子供、男女両方を含む意味でした。自分がただ知らなかっただけなのか。確かに「少年」という漢字は少ない年と書きます。漢字の中に男と表す文字はないのです。

少年という言葉に女子も含まれているということをみんなが知っているのかを確かめたくて十代から七十代の男女十人に「少年と聞いてどんな人をお願い浮かべますか？」と質問をしてみました。すると私の予想した通り少年に女子も含むと答えた人は一人もいませんでした。やはり私だけが勘違いしていたのではなかったのです。少年という言葉に男女どちらも含むという意味があっても、実際の生活の中で少年という言葉を使うときに女子が含まれない意味で使っている人が多いのだと思います。ニュースでも「〇〇才の少年が、〇〇才の少女が……。」と男女で使い分けています。少年は男女両方を含む意味があるはずなのにどうして少女という言葉があつて少男という言葉はないのでしょうか。

例えばお医者さんのことを「女医さん」と呼ぶことがあります。が、「男医さん」は聞いたことがありません。作家は男女両方いますが「女流作家」と呼ぶことがあつても「男流作家」とは呼ばないと思います。

これは医者や作家のような職業は男性であるという印象が強く残っていて女性には珍しいということからこのような言葉ができたのではないのでしょうか。

以前、新聞にジェンダーギャップ（男女格差）指数について日本の国際的なランキングがとても低いという記事があったのを思い出しました。政治家に女性が少ないこと、根強く男女差別が残っていることなどが書かれていました。そもそも私は「男女、父母、少年少女……。」など常に男子の意味の言葉が、先にきている並び方がずっと気になっていました。最近では学校の出席番号が男女混合になり、変わったこともあります。自分が女子だからこそ気になってしまうのかもしれないけれど、こういうずっと続いてきたことでも疑問を持つことは大切だと感じました。

少年の主張作文というタイトルに疑問を持った時には「少年少女」の主張というタイトルが一番いいと思っていたけれど、今回調べて考えているうちに「少年」の主張で正しいのだと気づきました。しかし、実際には「少年」という言葉を聞いて女子を思い浮かべる人は少ないのでしょうか。から、「少年少女の主張」というタイトルに変えて欲しいなとも思います。女子である私を感じたこの疑問を多くの人に知ってほしいです。それがジェンダーギャップのない日本になっていくきっかけとなるのかもしれない。

## 底辺の仕事なんてない

川越西中学校 2年 奥富 寛太

おくどみ かんた

僕の母の職業は、世間で言うところの底辺の仕事になるらしい。介護の仕事をしている。

ある日の夕飯時、テレビのニュースで、底辺の仕事ランキングを見た。介護の仕事は第十位だった。なんとなく気まづくなつて、番組を変えようとしたが、母の表情はいたって明るく、けろつとしていたのだ。そして、一言こうつぶやいた。

「底を支える人がいるから、社会が上手く回っているのよ。底辺の底は、縁の下の力持ちってこと。」

と、母は笑って言ったのだ。僕は、底辺という意味について考えてみることにした。

まず、母が普段どんな仕事をしているのか、介護の仕事が十位にランクインしているのには何か理由があるのか、調べてみることにした。母は介護福祉士という資格をもっているが、今はショートステイの生活相談員という仕事をしている。朝の八時半に出勤し、泊まっているお年寄りの朝ご飯の片付けからスタートする。片付けをしながらお年寄りのトイレへの付き添いや、介助もしなくてはならない。お風呂の介助などは、介護士さんがしているらしい。その間母は、泊っているお年寄りの様子、ちょっとした体調の変化などを、ケアマネージャーさんや家族に電話で伝えたり、利用の予約を受けたりと、電話応対に追われる。

そして、十時のお茶入れが終わると、昼食の配膳や、食事介助をする。のどに詰まらせないように気をつけながら介助しているらしい。介助の後、

やっと一時間の休憩がもらえる。

午後はお客さんが楽しめるように企画したレクリエーションを行う。風船バレーをしたり、ケーキバイキングをしたり、自分の考えた企画でお客さんが喜んでくれることが何よりうれしいと母は言っていた。

そして、三時のおやつ提供のあとは、自宅に帰られる方の荷物の整理、部屋の掃除などをする。忘れ物があると、自宅まで届けに行かなくてはならないので、必死で荷物を確認するらしい。

そして、最終的な事務作業を終えて、十七時に勤務が終わるそうだ。聞きながら、僕はどつと疲れてしまった。朝からずっとお客さんに気を配りながら、たくさんの業務をこなす介護という仕事は、やはり体力的にも精神的にもしんどいもので、しかも、それに見合ったお給料が出ないこともあり、まさにつらいだけの底辺の仕事。そんな印象を持ってしまった。

では、なぜ母は底辺の底は縁の下の力持ちと言って笑ったのだろう。介護は過酷で、家族だけでは難しくなり、気持ち的にパンクする前に泊まりの依頼がある。たった数泊でも離れた時間を持つことで、気持ちを新たに介護に向き合うことができる人もいるそうだ。

困った人の気持ちがあつても軽くなればと、一生懸命働く母の仕事は、底辺なんかじゃなく、社会に必要な仕事だと思い直した。

底辺の意味は決してマイナスな意味ではなく、立派な仕事だと僕は主張したい。

## ◆ 優 秀 賞 ◆

### 言語の学びを通して

私は英語を学ぶことが好きです。しかし日本を見渡すと、こと英語に限らずそもそも語学を学ぶことが好きという人は多くなく、さらには英語の必要性を全く感じない人たちがいるようです。そのような人達は「日本に住んでいるのに英語なんているの?」と言います。それは一見筋が通っているように聞こえます。日本だけなら日本語だけで事足りるからです。しかし私は、英語を学ぶということは単にコミュニケーションのための新たな道具を身につける以上の意味があるのではないかと思います。

私は中学に入るまで英語をまともに勉強したことがありませんでした。しかしやってみると単語を繋げて文にする手順が楽しく、今まで普段何気なく使っていたカタカナの外来語が正しく理解できたこと、例えば「カモン」が「カムオン」、「レリゴー」が「レットイットゴー」であるとしっかり英語化されてとても感動しました。そして私は英語を学ぶことに夢中になりました。それまでの私は洋画を見るときは必ず吹き替えで見ていたのですが、それからは必ず日本語字幕で見えるようになりました。最初は話している事が理解できなかったので字幕を目で追っていました。しかし、英語にだんだんと慣れてくると、役者さんのセリフも部分的に聞き取れるようになってきました。そしてあることに気付いたのです。字幕で表示されている日本語と、役者さんのセリフの意味が違うことが時々あるのです。それは英語が話せる人にか通じないネタや言い回しだったり、訳しづらい箇所を翻訳家が意識したりしているのだと気が付きました。私は小学生の頃は、翻訳というのは機械的にそして逐語的に訳すものだと思っていましたが、翻訳するということはとても奥が深く、解釈や表現力を伴うとてもクリエイティブな仕事でセンスが問われるものだとか付かされました。つまり翻訳された作品を見る人、聞く人、読む人は、誰もがそのオリジナルを作った作者の思いや意図を完璧には

秀明高等学校 2年 趙 芹菜

ちよう せりな

汲み取ることができないのです。なぜなら作品と作者たちの間に翻訳家があり、どんなに優れた翻訳も彼らの解釈や思いが少なからず入ってしまうからです。「それで困ったことなんてないから別に原作を読まなくていいじゃないか。」という人もいるでしょう。しかしどの言語にも語感やニュアンス、民族性や時代背景というものがあり、だから翻訳では乗り越えられない「壁」があるのです。それに気付かない限り私たちは日本語という土俵でしか世界を見られない、感じ取れなくなってしまうのです。私は洋楽の歌詞を見て日本語では聞いたこともないような表現を見つけると、英語が理解できなくて何て幸せなことなんだ!ととても嬉しくなります。それは日本語訳しか見ない、聞かない、読まない人達には経験できないことです。この英語や日本語の違いだけでなく世界には数千もあるというそれぞれの言語によつて世界観や思想感が異なるのです。

神聖ローマ帝国のカール大帝はいました。「二つ目の言語を持つということは、二つ目の魂を持つということだ。」と。つまり、言語が現実世界を作っているともいえる思想です。例えば日本語には「色」を表す言葉が何種類もありますが、三種類しか色を表す言葉がない言語もあるのです。また、男性名詞や女性名詞、中性名詞などの区別がある言語を話す人たちは、日常の中で無意識の領域であらゆる物に対して、男性、女性、中性のイメージを持って生活しているのです。そして私たちは物事を考えるときに言葉、つまり言語を通して考えます。従って、表現が違う分考え方も違うのです。そのため、ある言語を話す人たちの文化を真に理解するためには、その言語を習得することがどうしても必要であるのです。これこそグローバル化が進む世界で我々に求められるスキルです。このようなことから、言語を学ぶことはコミュニケーションの道具が増えること以上に価値があると思います。

# ◆ 入 選 ◆

## いつかの正解へ

秀明高等学校

1 年

佐藤 葉月 さとう はづき

私は今年の春、晴れて合格した高校に入学しました。自分の将来の夢を目指して、目標を叶えることを考えて決めた高校です。今はその高校生活にも慣れ、忙しくも楽しい日々を送っています。しかし、時々心の曇りのような気持ちを感ずることもあります。

私は今スポーツドクターを志しています。スポーツドクターはアスリートやスポーツを楽しむ人々の為に働く医師です。小さな頃から医学に興味があり、またずっと陸上競技を続けてきた私にとって、スポーツドクターは心の底からなりたいたい！と思う最高の目標です。しかし、それは大学で医学部に入るという厳しい道で、その為にどう行動していくのか、私は中学三年生のときの高校受験で自分の進む道の大きな決断をしました。どこに行くかたくさん考え、最終的に二つに絞った志望校。将来に繋がる勉強ができるが不安もある学校か、陸上競技や高校生活を満喫できるであろう学校か。将来か、高校三年間か。毎日たくさん考えて悩み、色んな人と何度も相談して最後に自分自身で決断しました。私は将来を選びました。夢が叶う保証はないとは分かっていたけれど、それでも私が一番楽しく笑っていたいと思ったのは将来だったからです。それから入学試験を受けて無事に合格し、高校に入学して、今日までの数ヶ月間を色んな思いで過ごしてきました。私が持っている心の曇りのような気持ちは、この決断のことです。私の決断は正解だったのか、自分は正しい道を進んでいるのか。この数ヶ月間、そのことを考えて悩んでしまったり、自分が下した決断に自信が持てないことを悔しく思ったりもしました。考え出せばきりがありませんけれど、自分の決断に自信を持つことは本当に難しいことだと思っています。

しかし、たとえそうだとしても、今私が思うのは「自分で選んだ道は自分で正解にしたい」ということです。不安な気持ちはあるけれど、私が選んだ道だからこそ自分で行動していくことができると思います。いつか振り返っ

たときに、これで正解だったと思えるように、今できることを精一杯やりたいです。

今世界で活躍しているメジャーリーガーの大谷翔平選手は、自身の様々な決断について問われたときにこう答えたそうです。「僕としては『やったことが正解』というだけなんです」大谷選手は自身の目標の為に何度も大きな決断をして、それを正解にしてきたからこそ、自信をもってそう言えるのだと思います。「やったことが正解」だと強く言ってくれる人がいることに私は自分の決断に自信を持つ勇気をもらいました。「これでいいんだ」「間違っていない」そう自分に頷いてあげられることは本当に大切だと感じます。私もいつか大谷選手のように、自分が選んだ道だけが唯一の「正解」だと言える強さを持てるようになりたいと思います。

私の決断が正解だったのかどうか、今はまだ分かりません。ただ、あの選択は私の人生で初めての大きな大きな決断でした。どちらが正解か分からなくて本当に迷って、でも絶対に決めなくてはならない、そういう決断がこんなにも不安で未知のものなのだと初めて知りました。道を決めた後も不安が付きまるとして苦しいけれど、たくさん迷って決断したからこそ、自分で正解にすることに意味があると私は思います。

私は絶対に夢を叶えたい。自分の決断を正解にしたい。あの日の自分に「それで合っている」と言っておきたい。そしていつか、自分が勇気をもらったような強く優しい言葉を誰かに言っておきたい。この先にも、自分の決断を不安に思ってしまうときや高い壁を前にして挫折そうになるときがあると思うけれど、たくさんの人からの応援や人生の先輩たちからの言葉を心において、乗り越えていきたいです。いつかの正解へ、自分で選んだこの道を信じてこれからも前進していきます。

## 【選 評】

審査員長 月越小学校教諭 佐藤 麻友

「川越市少年の主張作文」は、川越市青少年を育てる市民会議・川越市・川越市教育委員会が主催する作文コンクールです。当コンクールは青少年が日常生活の中で考えていること、感じていることを広く社会に訴えることにより、同世代の青少年の意識啓蒙と、青少年の健全育成に対する大人の理解と関心を高めることをねらいとして、昭和六十二年度から実施しています。また、最優秀賞・優秀賞の作品は次年度に開催が見込まれる青少年育成埼玉会議等が主催の「青少年の主張大会」に推薦され、当大会の中学生の部最優秀賞受賞者は、さらに独立行政法人国立青少年教育振興機構が主催する「少年の主張全国大会」への出場候補者として推薦されることとなっています。

歴史と重みのある当コンクールに、本年度は中学生の部に七百九十九編、高校生及び一般の部から百七編という多くの応募がありました。その中から審査の結果、中学生の部から十三編、高校生及び一般の部から二編の合計十五編を選出作品に決定いたしました。

応募作品のテーマには、「戦争と平和」「ジェンダーニュートラル」といった、現代社会において世界中が関心を寄せる題材を、自分の身近な経験に基づいて考えを深めるものが多く見られました。また、「他者との関わり」について悩み、考えた作品が多くみられた一方で、自分の悩みや疑問点を身近な人に話すことで自分の見識を深めた作品も見られました。日本が抱える社会問題が多岐にわたる現代において、これからの未来を担う青少年の皆さんには、他者との関わりを大切にしながら視野を広げてほしいと思います。

入選作品の内、上位四作品は次の通りです。

最優秀賞 佐藤 早良子さん 『私たちの知らない傷跡』

優秀賞 味村 優芽さん 『家族に「ありがとう」』

優秀賞 矢島 更紗さん 『清掃と向き合う』

優秀賞 趙 芹菜さん 『言語の学びを通して』

最優秀賞になった佐藤早良子さんの『私たちの知らない傷跡』は、自身が舞台上で演じた演劇をきっかけに、「戦争の歴史」について記しました。平凡な現代に住む私たちには「命」を奪われる恐怖や「生きたい」という強い執着は理解しきれないと感じた佐藤さん。戦争という大きすぎる難題に、今の

自分が演者としてできることは何か、真正面から向き合う文章が、平和を切に訴えかけてきます。

優秀賞になった味村優芽さんの『家族に「ありがとう」』は、感謝の言葉を通じて家族を思いやる気持ちに焦点を当てた作品です。大切な家族に言いたいのに言えない「ありがとう」の言葉を巡った文章は、味村さんの見聞きしたものをそのまま切り取ったかのようにありありと情景を思い浮かばせ、青少年ならではの純粋さと気恥ずかしさを丁寧に表現しました。

優秀賞になった矢島更紗さんの『清掃と向き合う』は、中学校で出会った黙々清掃の伝統から、清掃への向き合い方の変容が記されています。誰もが感じたことがあるであろう「清掃はめんどくさい」という気持ちを持つていた矢嶋さんが、学級委員という立場から清掃交流会を企画するまでの心情の変化は、同世代の心も動かす説得力があり、前向きに取り組もうという気持ちの強さを感じます。

優秀賞になった趙芹菜さんの『言語の学びを通して』は、多言語を学ぶ意味について、自身が英語を習得する過程で感じた価値を深く考え記しています。グローバル化が進む現代において、単にコミュニケーションのツールとしてではなく、その言語が生まれた世界観や思想を理解することにつながる考察する姿は、これからの未来を作り上げる若者として、頼もしさを感じました。

他の入選作品も、日々のめまぐるしく変わる社会情勢を敏感に感じ取り、その中で自分自身はどのように振る舞うことができるか、悩み考える姿が目に見え、浮かぶような切実な主張が多く見られました。子どもから大人へと成長する多感な時期だからこそ、青少年のみなさんにはこの作文集を通して同世代の主張に触れ、他者の主張を知ってほしいです。世の中の事象を自分事として捉え、他者の意見を認め、その上で自分がどう考え、どう生きるのかを思索してください。

解決すべき社会問題が山積する現代の社会情勢において、青少年たちは日々アンテナを高く張り、思案し、時に立ち止まりながらも、着実に歩みを進めています。彼らの心のうちにある確かな主張を真摯に受け止め、さらによりよい社会を築くために、皆さまにご一読いただければ幸いです。